

大滝ダム白屋地区亀裂現象対策検討委員会

第3回委員会 議事要旨

日 時：平成 15 年 10 月 31 日（金） 10:00～12:00

場 所：新大阪シティプラザ 3階「雅」

出席者：

委員長	渡	正亮（地すべり学会顧問）
委員	吉松	弘行（砂防・地すべり技術センター斜面保全部長）
”	中村	康夫（独立行政法人土木研究所地質官）
”	永山	功（独立行政法人土木研究所水工研究グループ長）

議事について：

1. 降雨および貯水状況
8月以降大滝ダムの貯水位は304.8mから3ヶ月間で約47mの水位低下を行ったことが報告された。
2. 調査実施状況
調査ボーリング等の緊急調査内容が報告された。
3. 観測データの確認
水位低下により出現した亀裂および変状の状況およびボーリング調査の結果から、地すべり末端部が河床付近にあると推定された。
9月中旬以降地すべり運動は全般的に沈静化したことが報告され、確認された。
4. 地形・地質とりまとめ
白屋地区の緩斜面については、今回の地すべりを生じた範囲に対応する地すべり地形が認められないことが確認された。
ボーリング調査の結果、白屋地区の緩斜面ではある深度まで（最大約70m程度）岩盤の緩み域が確認された。
緩み域は泥質岩優勢層中に存在し、その下限は地層の境界とは必ずしも一致していないこと、今回の地すべり現象を起こしたすべり面は、斜面下部では緩み域の下限すなわち地層の境界付近に形成されていること、一方、すべりの頭部境界や上流側の側面は、泥質岩優勢層中の緩み域内と推定されることが確認された。
5. 地すべり範囲の検討
亀裂集中ゾーン、地表の変状、孔内傾斜計の動き、地層分布とすべり面の関係等から総合的に見て、地すべりの範囲および隣接する緩み域の範囲について検討され、了承された。
6. 対策工の基本方針検討
対策工の検討に必要な地すべりの安定解析の手順等について検討をおこなった。
対策に関しては、地すべりの範囲について重点的に検討すること、また緩み域の範囲についても安定性を検討する必要があることが指摘された。
対策工法としては押さえ盛土を主体とし、その他の工法の組み合わせを検討することが了承された。
7. 今後の対応
今後の斜面監視体制について提案され、了承された。